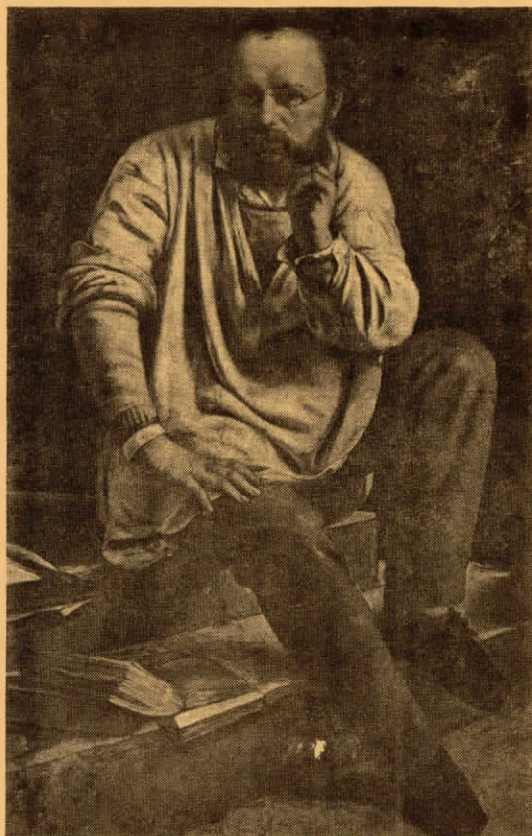


毎月一回15日発行 昭和48年10月15日発行・46号(昭和45年9月4日第三種郵便物)

リベルテール

10月号



Libertaire VoL, IV, No 11

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月 四日第三種郵便物認可
昭和四十八年十月十五日発行第四十六号

定価一〇〇円(送料共)

ば、心もた
が、生憎、私

リベルテールが創刊されたのは一九六九年十二月で、その創刊号には「アナリズムは永遠の思想であり、普遍の思想である。これを歴史的、地理的、社会学的、経済学的に究明しようとする意欲的な若いリベルテールが、全国的に、国際的に結ぶ機関である」ことを宣言した。

それから三年、リベルテールはまだこの期待を実現しているとは言えない。しかしリベルテールは、アナリズムが自由、平等、友愛という昔ながらの三原則に立って、最高の秩序アナルシーを実現しようとするアナリスト（リベルテール）のグループであることに変わりはない。したがって現代社会の階層的権力構造を、人間の狡知と欺瞞にもとづくものとして否定し、万人一人一人の生の充実を実現しようとする社会的な変革を目指すものであることにおいても変わりはない。

こうした変革への過程において暴力、非暴力の二つの手段が考えられる。しかし暴に対して暴をもつてすることが、如何にも勇壮で合理的で容易だとしても、暴力を用いること自体が他に対する権力行使であることを知るがゆえに、リベルテールは非暴力を立場とする。もちろん暴力と非暴力の境界は微妙だということ、非暴力は暴力主義以上に困難な道であることは承知の上である。この立場で連合し、連帯し、反権力、反戦の戦を戦かう（三浦）

目次

「象徴天皇への戯文」

―大沢の「われらが内なる天皇制について」―

山本飼山のこと 望月 百合子 8

トンチンナカマ スギトージロー 11

投稿

辻潤とあくび

労働運動寸感 ハギシン 15

野火

アナ連は再建されるべきか やまもと あき 21

「象徴天皇への戯文」

―大沢の「われらが内なる天皇制」について―

ヤマモト・アキ

ここには二人のアナキストと自称する売れっ子が、天皇制について、文を草している。秋山清の「天皇制国家とアナキズム」―岩佐作太郎の場合―は、週刊「平民新聞」に岩佐老人が書いた「在米運動史秘話」から老人の天皇制観の一端を臆測しているものであって、直接には君の天皇制に対する態度を表明したものでないから、稿料になりさえすれば、という計算だろうと問題にしないのが大人の態度かも知れない。が「天皇制とアナキズム」という見出しをつけられたのには、自らはアナキストと称しなくても、少しでも自分のアナキーを持しているものにとっては、当惑でもあり、その戦線にあるための発言は避けられない。

「思想というものは、所詮その場しのぎ以上のものでしかない」とポール・ヴァレリーがいつていたと「現代のアナキズム」（ダニエル・ゲラン）を書いた江口幹が、訳書の後記に書いていた。文を売る人は、それだから困るのだが、やはりサロンの冗談以上の何ものでもないことが明らかになった。

の一篇の大沢の天皇制観を読む限りでは、最初から終りまで、その疑問を解消することができなかった。

「リベルテール」―無政府主義者の機関紙がこの大沢論理をとりあげるのは、「アナキズムの天皇制国家論」―これは秋山清の雑文の表題だったねーとしてではない。似て非なるもの、アナキズムを偽装した、仮面の大沢理論は、日本のアナキズムとは無縁であるという、その区別のためにである。

ではこの文の筆者は、アナキストか？自らはアナキストとは言わない。アナキズムは教理ではない。だからアナキズムという確立された教理の信奉者ではないという意味で、自分はアナキストとは自称しないのだ。それでも大沢理論は、三島由紀夫天皇制論がアナキズムでないのと同じ程度にそれは、アナキーの姿勢の理論ではないということとは、実感をもって言えるのではあるまいか？ともに東大のエリートらしい特有の生活なきインテリの観念の倒錯である：なるほど商業ジャーナリズムは、この程度の無毒性のものなら市場価値ありと評価するのだということが悟れたこれは少くとも、個の生命からほどばしり、その生死をかけた思索ではなく、秀才だと評せられる文化人の戯作だということはたしかである。

三島は小手先の器用な男だった。文章も修辭もうまか

った。あたかもそれが文学であるかのように見せかける錬金術にかけては天才的だった。だから日本だけでない。世界の文学界が本ものと贋ものの区別がつかずにすんだことノーベル賞をやりかけた。が彼が政治論議に入ったときには、彼は十六七才の戦争中の天皇制教育のまに三〇年間、生長のとまった畸型的な発育不全だった。さすがに彼の額が市ヶ谷の総監室に転ったとき、首相のズル栄ちゃんさえ苦笑いするより方法がなかった。

大沢正道も日本の東大系の学究にあり勝ちな輸入文化の切売屋、紹介者であった間はまじめで篤実なプロ・アナキズムの学究としては重宝でしかも貴重な寵児だった。が東京のしかも東大の土壌では、獨創性は育ち難いものだ。絶無ではないが極めて稀れである。外国文献の片言を巧みにあちこちあしらいながら、時に小手先の器用さ機智をもってあたかもそれが獨創性ある理論であるように見せかける。錬金術師的な修辭は、言過しをこと更に難つかしく擬装しているが論理はきわめてギョチない。幼稚である。しかも粗雑すぎる。その最大の弱点は日本の歴史に対して、その白痴なほどに無知すぎるといふことである。

大沢の天皇制理論

大沢の天皇制論は (1) 性格分析 (2) 三島の天皇制観批判 (3) 物質的な土台に分れている。

いったい、どういうことを言おうとしているのか？あの敗戦になっても天皇制が生き残った。現人神は人間天皇になった。それでも天皇は象徴天皇として温存され、戦犯として処刑もされなかったし、讓位もなく国体は護持されたのは日本の天皇制のこの不可思議な神秘性はどこにあるのか？

これに対する人民の、ピープル（庶民）の答えは簡単で明瞭である。アメリカが日本を占領し、管理して行くのに天皇への迷信を残しておく方が便利で効果的だった。他の占領国の連中は天皇制を温存するな、これを廃止せよと迫った。だがアメリカは日本の将来の責任を持たされるのはアメリカだ。餓死を救ってやらねばならぬ緊急問題。俺に委かせる。その代りもう軍国主義が復活しないよう、永久に絶対に戦争ができないように戦力軍隊のもない、宣戦が布告できない、物理的な反抗ができないように去勢すればよい。自衛権がない、それは永久にアメリカが核の傘で護るから天皇へのあの明治政権が五〇年かかってせっかく自由意志を持たない機械人間を、できるだけ人間として復権させない方が得策ではないか。だから現人神ではいけない。あの万世一系の神話の底を

破壊してただの人間だ。氏神さまのようなものだ、それでも象徴でもいいまの天皇を救けてやる、これがアメリカの日本管理方式だという話しがまとまっただけだと答えてどこの疑問の余地があるか？

ところが大沢理論は、「そんな話しは床屋談議だ。学問的じゃない。下司、頭の悪い奴はそれだから困るのだ。それでは俺達、インテリ、文化人、学者、思想家の出る幕がない。それはこう解釈したときも、いかにもっともらしくなる。

日本の天皇制は俺の分析では二重構造なのだ。一つは構造的、今一つは体制的の二性格だ。天皇制の、そのA、B、でもよいI、IIでもよい。体制―統治原理それが人民とかかわりのある天皇制の本体であり、基盤なのだが、そうは大沢は言わない。体制天皇制（B、I）は解体して、人民主権にした。代議政治という国会が最高機会、その総理が、いままでの体制天皇に代る主権者だ。これは新憲法で変った。かえた。がその上に象徴として、天皇が戦犯にも問われず、七十余才の天寿まで温存されている。この上の天皇と下の人民との構造は変化がないから、天皇制構造は変らない。これはアメリカの意志でない。日本人がもともと天皇

制的人間、天皇制的民族、それはレーニンでさえ日本をそう分析している通りだ。われらの内なる天皇制が天皇制の構造を変更を許さないのだ。左翼の天皇制理論は、この構造と体制の二重性格を知らない。未発見だ。だから日本民族のタブーである象徴天皇の秘密を解明できないのだ。どうだ卓見だろう。恐れ入ったか

こう見栄を切るからには、いろいろと生硬な私造語をつかって貧弱、単純でしかも独りよがりな二重構造の設定に、仮飾の鎧をまとわせて、それこそ鬼面人をおどろかすの類い、社会科学の学問的な分析であるかのような仮装をしてくれる。なんでこんなに学のない庶民には、とても筋がたどれないような難解な仮飾の外装をしななければならぬのか？ 床屋談議でわからないところが味噌なのかもしれない。庶民にその筋書が簡単にわかったら御利益がないし原稿料にもならないからか。もし天皇が暗殺される事件が起きたら

「ここでも天皇の死が天皇（制）を解体する方向に働かず、むしろ強化する方向に貢献したことは、まず間違いない」

「一九四五―四六当時天皇（制）が本当に危急存亡

の瀬戸際に立たされたと仮定して日本の支配階級が最後に打つ手は、左翼を偽装しての天皇暗殺だったかもしれない。これは決して推理小説の筋書であることではない。一九四九年下山事件は、現実についたことである。」

に至っては、これ一体どういう思想系統の人間の倒錯かと、下山を殺したのはGHQであるとみている松本清張ならずとも、眉に唾をつけざるを得ないであろう。

「日本列島の民族構成が『九十九%以上』単一民族からなっており、しかもその状態が千数百年以上持続されている。」

とレーニンが一九一七年に指摘しているという貧困な日本歴史に対するカビ臭い認識では、この象牙の塔のアカデミックな読書人、日本歴史については勉強してもしないし戦後の研究の発展を読んではいけないといわざるを得ない。

この大沢君の天皇論をみて一番喜ぶのは保守のタカ派だろう。幸徳以来の反天皇制の伝統を持つアナキストという連中が、ここまで去勢されたのなら、これなら象徴天皇制、アメリカ統治の代貸としての体制は、どんなに主権在民と書いていても、これは実際的には彼らにとって絵に描いた餅だと自信をかためるであろう。民社から

公明、社会党までは、その怯懦を合理化してくれた観念の技巧として、安緒の胸を撫でるすだろう。わずかに反天皇として革新の座標を保っている共産党はやはりアナキズムなどブルジョワ自由主義の亜流にすぎなく、窮極は反動的な役割以外にあり得ないと威丈高になるだろう。

が、歴史家はアナキストの日本の民族と社会史に対するアナキストの不勉強と貧困を憐憫の情をもって笑うだろうし、歴史に多少でも興味を持つ体制派の国民は、なんたる学者馬鹿が顔を出して来たかと軽侮し、あきれざるを得ないでしょう。

「われらがうちなる天皇制」は「おれたち天皇制人間」となり、日本民族の精神構造を特徴づける習俗の論理は、まさしくこの所産であり、「この論理と習俗が完全に解体されない限り日本国家は、つねにその安泰を誇ることができる。天皇制は不滅である」といったことになるであろう。「われらがうちなる天皇制」

（二五六頁）V

自称アナキスト大沢正道が、その論議の対象としたのは、こういう天皇制だということ実は滑稽なことである。この9・20の朝日の「天声人語」に学者馬鹿の例をあげて世相を皮肉っている。研究室にて日露戦争が始

って終るまで知らなかった遺伝学の池野成一郎、風呂で自分の着ている着物が見分けのつかなかった東北大の鉄の博士本多光太郎、それから「の女子大生殺しと一家四人心中、神奈川の学生の内ゲバ殺人事件、これを読んで思いあわせたのが、この大沢君の日本の天皇制認識である。これはいつ頃のことか。彼が生れたのが一九二五年（昭和元年）、終戦が20才だ。この間、家庭で、学校でたまたまこまれた体制観念、三千年の日本歴史を通じてむしろ突然変異的ともいえる。最も強烈で完璧主義の天皇信仰、天皇制観。なるほど三島と大沢とは同世代の東大の秀才だ。がこれはカビ臭い30年前に、もう博物館入りした結晶体である。

これを土台として発想したから、三島は市ヶ谷で切腹して、首になった。大沢君は、一応アナキストかアナ系かの看板でこういう戯文を売っているのだから、これだよと言ったのでは、金にならない。これを料理するのだという姿勢をシェスチュアとして当然見せているが、材料が古いのはいまの日本の世代人の食える料理にはならない。

「翻って日本で、天皇および天皇制に関わる研究にどれほどのものがあるか、と問うときわれわれは世界に対して深く恥じなくてはなるまい。天皇および天皇

制の内実を説明することは、日本人の国際的な任務である。」(全書、二〇八頁)

恥づかしいのは大沢君らだけが象徴天皇の政治的意味がわからないのだということだけであって、われわれの問題ではない。あれは、アメリカの日本の戦後管理、統治の影絵だと夙に解決済なのである。

が、あまり頭がよくないからそんなことを言い出したのか、大沢君はその持つて廻った彼なりの説明を「Ⅲ 天皇制の物質的土台」だなどと、得々と説いている。

内容も、実は陳腐なこと、英国は民族の通過地帯であり地中海からのケルト族、仏独のラテン、ゲルマン、それに北からのヴァイキングらの移動と征服が繰返されたのに対して、日本列島はアジアの東辺のフキダマリの混融のルツボだということだけである。吹き溜りということをや、アメリカの東洋学者のエーベルトとかドイツの日本学者F・ウルフの外国用語を使ってハウルティマ・トウイレVなどというとなにかそれが、智的な響きをもたせるアクセサリー効果をもつ。これを計算した見栄の戯文じゃないだろうか？ では一体このお洒落のサロン・アナキスト大沢は、この天皇制にどう対決するのだということには明確な権力を示さず言葉を濁して逃げている。が君のかっこだけの偽装の学問的なエッセイの結論はこ

うだ。

「むしろ、千数百年の天皇制の歴史をわれわれの内部にとりこむことで、このからくり仕掛を一つ一つ明らかにだしていく方法を試みたい、というのがぼくの意図である。というのは、天皇制はもともとわれわれの外部に存立する制度であるにとどまらず、ある局面ではわれわれ自身だと、ぼくには考えられるからである。天皇制について語ることは、一面自分について語ることだと思われるからである。」

大沢みずからが、天皇制的人物であることを認めた上で、

「もしそうだとすれば、われわれの内なる天皇制として問題をたてることで、われわれ自身の内にある、あの変幻自在なからくり仕掛ははじめておのずからその正体を見せていくにちがいない。それは外部にはなく、その内部にあるものだからである。そしてこの内なる追求を通じて、一つ一つ、天皇制の憑依はわれわれ自身の内から払い落とされるはずである。」

このような視点から天皇制論集は、おそらくこの本が最初であろう。それはたしかに最初の一步でしかないが、同時にたしかにその一步は踏みだされたのであ

る。今後、ここから天皇制論議が展開されることを期待した。」(全書二六一頁)

しかし大沢君／アナキストにとって、天皇制の問題など、とっくの昔から五〇年も前から結論は出ているんじゃないかね。

偶像を破壊せよ。これが解放思想の第一原点である。それはアナ・ボルだ。デモクラシーなどの違いではない。

「自由の身となるには、個人は親たちから教育者達によって負債をつめこまれた荷物をふるいにかけることとから始めなくてはならない。▲偶像破壊Vの大事業を専心しなくてはならない。手始めは、いわゆるブルジョア道徳である。」

「スチルネルは、現代の精神分析学に先立って内在性を観察し明かにしている。：彼の個人復権に際してフロイドふうの潜在意識も発見している。」

これは、江口幹の訳したダニエル・ゲランの「現代のアナキズム」からの一節だ。これが真実にスチルネルの言葉なのか、ゲランのスチルネル観なのか、その文献的な詮索は暇人にまかせておいてよい。要はこの考え方が解放思想としてどうかの問題である。外国人の言葉が

お好きで、それが商売であるらしい大沢正道という翻訳屋さん外国の思想の受売人である御仁にとっては、ぼくが言うよりも利き目があるかと思って引き合いに出してみただけである。

「日本人はみな天皇制の人間だVなんていう寝言が、どうして大沢君らの口から出てきたか？ 君らはあのドンキホーテの三島と同じ部族の特殊人らしい。▲天皇と神Vこの偶像の破壊から近代の解放思想の原点があるのじゃないか？」

天皇制の呪縛から自らを解放放つだけではない、お上、氏神や八百萬神、世界的宗教の一神教の神、およそ宗教的なその呪縛からも解放されなければ革命なんて口にするのではないのか？

君達の育ったあの時代は不幸だった。日本人がみな不幸だった。それを阻止できなかった明治の人間としては責任を感じている。だがそれはそれなりに自己革新を行ってできる限りの実践を闘ったのである。時に利あらずとみてその戦いに停止も後退もある。だが変節はしない。その戦いは僕らの一生だけでは終わらない。だからヤングからオールドと罵視されても、俺達は息を長くものとごを視ている。だから大沢君や秋山君が、いまアナキズム思想が、新しい衣装のもとに復権の時代がきて、たと

え商業ジャーナリズムの分野において、その代表選手として活動していることに對しては結構なことだと喜んでゐる。その市場価値を獲得するために、馬子にも衣裳だ、

山本飼山のこと

望 月 百合子

今から四十年近い昔に大変ロマンチックな大恋愛をしてその結婚を私達夫婦がはからずも手伝うことになった林久一という同志の消息を信州の望月桂さんを訪れる度に私の夫は尋ねた。すると桂さんの令息明美さんが、もしやこの人では、といって日下部桂という人の著書「松本平文学漫歩」を送ってくれた。この本の中に日下部さんが林さんのことを詳しく書いておいてくれた。ある時

林さんはこの人に山本飼山のことを話してその伝記を書きたいと思ひ乍ら果せなかつたので、ぜひそれを書いてくれと依頼したという。書きましようという約束はしたものと日下部さんも資料となるものがなく、唯一の手がかりの「飼山遺稿」も手に入らなかつた。だがやつと飼山の小学時代からの親友川船模という人の蔵書を借り受けることができて、林さんとの約束が果せることになり、その略伝を文学漫歩の巻頭に入れた。

智的、文化的、学問的な扮装も必要だ。だが本質的に、節を曲げては体制を喜ばせることになってはまずい。

飼山については桂さん父子と私の夫がかねてからその遺跡を訪ねようと話していたが、所在が判明せず、つい先頃は赤羽巖穴と百瀬晋の生家や墓所を訪ねて来たところ、私にも飼山は知りたいた先輩の一人になっていた。そこで日下部さんの書かれたものから頂いて若い同志にお裾分けをと思ひ立つ。

山本飼山といつても若い人々にはなじみのない名前と思うが幸徳秋水にも近づき大杉栄の「近代思想」第一号には「新しい戯作者」の一文を寄せ、第四号には「アンドレエフの社会観」を書いてゐる。その頃の日記に彼は

彼は明治四十五年九月二十二日の日記に「朝相互扶助論のうち動物の相互扶助下の部訳了」と記しているが、世は明治天皇の大患で暗たんとしている最中、早稲田の一学生の飼山はわき目もふらずクロボトキンに取組んで

いた。この時彼は親友川船模への手紙に「今日の日本ではクロボトキンという名そのものが已に秩序紊乱を意味するものであるから彼を崇拜しているなどと云うと頗る

危険な話だが、しかし實際の話、僕は彼を衷心より尊敬している。殊に彼の流れるような文章を愛読して措かない。出版の可能、不可能を問わず僕は一生の事業として彼の著書のすべてを翻訳したいと思つてゐる」と書いてゐる。後にクロボトキンの自伝も翻訳しているが、いづれも彼の生前に陽の目を見ることはなかつた。この相互扶助論の翻訳は恐らく日本で最初の翻訳であろう。彼はクロボトキンの肖像を壁に掲げて日夜その風采に親しんでいたが、後に刑事につけまわされるようになると危険と思つたか、とりはずして大切に行李の底にしまい込むだけの要心はした。

大正二年七月早稲田大学英文科を三番の成績で卒業したが、その同年の十一月四日にはもう飼山は大久保で鉄路に飛び込んで自殺して果てた。友人達はこれを思想自殺と云つて悼んだ。

飼山は東京神田和泉町一番地で父幾蔵母花子の長男として生れ一歳と命名された。父は信州島田村の河野家の出、母は元幕臣の娘、父はその婚養子であつた。二才の時父母と共に大阪に移り住み、八才で父を失つた。翌年

母子は父の生家島田村の河野家に寄寓し、そこで小学校に通つた。十二才の時母は再婚して大町に去つた。

この小学校の先生にキリスト教徒の望月直弥という人がいて飼山の一歳はその感化でキリスト教徒になり先生や同級の友達と共に「真理の光」というプリント雑誌を出した事もした。明治三十七年小学校を卒業すると松本中学校に進み、キリスト教会に入会してゐたが、やがて教会にもキリスト教そのものにもあきたりなくなり、三年生ごろからクロボトキンの書に近づき、次第にアナキズムに活路をみいだすようになった。そのため反戦反軍国主義の作文を書いて停学処分を受けもした。卒業間近の四十一年から二年頃までの日記はそれら反軍国の言葉で埋まっている。「清国皇帝の死を伝う……立てよ孫逸仙。西太后死せりと、快なる哉、快なる哉」というようなクーデターに快哉を覚える文章もみられる。

彼は又同人雑誌を出したり小説類をよく読んだらしく特に藤村を愛読した。しかし一番感動したのは木下尚江の「火の柱」や「墓場」であつた。「墓場読み終る。社会主義を棄て同志を棄てあらゆるものを棄て、自己を革命せんため畢生の力を尽されたる木下氏の苦衷、真に涙なきを得ない。あゝ木下先生煩悶の淵に沈める予は只先生を信頼するより外に道を知らぬと日記に書いてゐる。

明治四十二年四月早稲田の高等科に入ったその十日、日比谷の青年会館で「野人の希望」と題する尚江の演説をきき、その風采に始めて接して感激した飼山は尚江に近づき親しんで行ったが、やがて尚江が社会運動に背を向け静座に凝っているのを知って失望して離れ去った。日記はこの頃から二年半ほど中断していてその間の動向は分らないが、この間に幸徳秋水に近づきその家にしばしば出入りしていたのではないかと川船模氏は云っている。日記の二年余の空白はそのためもあるうが、幸徳の大逆事件には累は免かれたものの、よほどショックを受けた模様とこれも川船の言葉だ。

早稲田時代の飼山について同級生だった広津和郎が実名小説集「同時代の作家たち」の中の手帳の一部に詳しく書いている。殆んど誰とも口をきかず友人を作ろうとしない内向性の学生と印象されていたが、それでも入学して半年もすると誰いうとなく「彼はアナキストだ」という噂が立ったという。

明治四十五年六月二十九日、渡辺政太郎に連れられて売文社の同人会にゆき、はじめて堺利彦に会った。そこに大杉も荒畑寒村もいた。その晩彼は「無限の感慨に打たれ独り安藤坂を上りて帰宅す。容易に眠られず」と日記に書いている。売文社へ渡辺政太郎につれられて行った

のだから渡辺の北風会にも行っていたと思われるし、この時大杉のあの美しく大きな眼とさうそうたる白哲の風采にまず魅されたものであらう。

優秀な成績で早大を出た彼は国民新聞に入社しようとして妨げられ、教師になろうとしてこれも警察の干渉で駄目、しかも彼の友達までもあらゆる職場から締め出される破目に立たされた。

このような世に生きる意義を失ったのか、憤懣やるかたなかったのか、戦い抜く力に自信が持てなかったのか、寂寥に堪えなかったのか、ともかく彼は自殺して果てた。

矢来倶楽部での追悼会には同級生二、三十名と島村抱月、金子筑水、内ヶ崎作三郎の教授連に堺利彦、大杉栄も出席して彼の死を惜しんだがそれ迄親しい口もきゝ合わなかった同級生達の心を打ったようだった。

後に松本中学校校長は「わが校から木下尚江と山本飼山を出したことは遺憾である」と生徒に訓辞したという。

尚昭和十五年頃信濃毎日に連載された木々高太郎の小説「笛吹川」にこの飼山が登場していると目下部氏は記してゐる。